

## 三宿病院消化器科における臨床研究と学会誌への報告のご案内

三宿病院消化器科では、三宿病院倫理委員会の承認を得て、「ヘリコバクター・ピロリ胃炎の経鼻内視鏡を用いた診断についての研究」を行うことになりました。

胃に感染するヘリコバクター・ピロリ菌は胃だけではなく食道や十二指腸を含めた上部消化管の様々な病気の発症に関わっています。また、ヘリコバクター・ピロリ菌に感染したことが有るのか無いのかによって胃の検診の頻度も異なってきます。したがって、患者さんのヘリコバクター・ピロリ菌の感染状態を診断することが上部消化管の診療には大切です。その第一歩が内視鏡検査です。胃にヘリコバクター・ピロリ菌が現在も感染しているのか、既に除菌された状態なのか、あるいは、もともと感染していないのか、を内視鏡で判断することになります。しかしながら、このようなヘリコバクター・ピロリ菌の感染状態を内視鏡所見から判断することは必ずしも容易ではありません。一般的には多数の内視鏡所見を総合的に勘案して判断することになりますが、各所見が必ずしも一致するとは限りません。特に、現在も感染している状態と除菌後の区別に苦慮する場合があります。一方、ヘリコバクター・ピロリ菌が感染すると胃粘膜に発生した炎症によって胃粘膜の細い血管や腺管の構造が乱れてきます。除菌されると乱れは是正されます。この乱れの状態を内視鏡で捉えることによりヘリコバクター・ピロリ菌の感染状態を推測出来ると考えられます。しかし、胃粘膜の細い血管や腺管の構造という微細な所見を捉えるためには拡大内視鏡と言われる太い内視鏡を経口的に挿入するしかありません。この内視鏡を日常の臨床に用いることは出来ません。

最近開発されたレーザー光を用いた細径の経鼻内視鏡（EG-L580NW）は、内視鏡先端を胃粘膜に近づけることで、拡大内視鏡ほどではありませんが、ある程度の拡大観察が可能です。同時に、微細な所見をより明瞭に視認できる画像強調といわれる機能を持っています。そこで、日常の臨床において、この経鼻内視鏡を用いて胃粘膜の細い血管や腺管の構造の2所見を観察することがヘリコバクター・ピロリ菌の感染状態の診断に有用か否かを検討する研究を立案しました。

対象は日常臨床において、患者さんを適切に診療するためには内視鏡検査が必要と消化器科担当医が判断した患者さんです。内視鏡先端を胃粘膜に近づけて観察するという通常の内視鏡検査では行わない行為が発生しますので検査時間が最大で1分程度長くなります。

学会誌に内視鏡画像を掲載する場合は、対象となった患者さんの臨床情報は匿名化によって管理され、プライバシーが保護されます。また、ご自分の臨床情報を研究に使わないでほしいというご希望があれば三宿病院事務部庶務課長宛までご連絡をいただけますようお願いいたします。なお、研究への使用の拒否の意思を表明されても、診療には全く何の影響もなく、いかなる意思においても不利益を被ることはありません。

今回、我々は当院の倫理委員会の規定に基づいて、三宿病院のホームページにて公開することといたしました。尚、当件についてのお問い合わせやご相談等がございましたら、三宿病院事務部庶務課までご連絡ください。